



Est.1912

まこと館だより

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局



「天国のアミーゴ」



久しぶりに演奏。ピアノとのデュオ。ギターを引っ張り出して弾き始めたもののどうも調子が悪い。ギターは「覚えるのに三年、忘れるのは三日」などと言われるが「こんなに下手くそだったか？」と嘆き節。明日45歳になるという日にあの世に旅立った相棒が遺したギター。ふと見ると「あれっ、弦高が高すぎないか」じっと見ると、やっぱり!ネックが極端に反っている。こうなるとフレット音痴といって、調弦そのものが不能になる。おそらくギターとしての寿命もとうに尽きていたのだろうが、放置していた自分のせいと反省する。

比較的新しいギターに持ち替えて「これなら何とか」と気を取り直す。翌週、今度は永年連れ添った「ケーナ」が壊れた。低音域が裏返る。どこかに小さなひび割れが起きているのだ。先週はなんともなかったのになあ。こちらも20年以上ひびを塞ぎながら胡麻化してきたが、素材が「竹」の笛としては寿命をはるかに超えている。こっちも急遽予備のものに持ち替えて、残りわずかに迫った本番に向けて、大慌てで唇と指をなじませる。

思えば、永年バンド活動を引っ張ったリーダーも一昨年リンパ腫で他界している。楽器たちが追いかけたような気もしてくる。「アサヒちゃんがまた、なんか始めたぞ」と二人で笑ってるかなあ？

『ギターとケーナは天国へ行く、しかし俺はまだ当分そっちへ行く気はない。酒でも呑んで待っていてくれ』頭では理不尽だと分かっているのだが、気持ちがいそう思う。
(高齢事業本部 本部長 旭 博之)

本部事務局だより 「理念と経営」

どのような事業であれ「事業の目的は喜ぶ人を増やすことである」と近代経営学の始祖であるドラッカーは言いました。また、経営の神様と言われた稲盛和夫氏は、事業に大切なものは「理念＝心の持ち方」と「経営＝計画的・持続的な意思決定」が必要であると言っています。この二つは、車の両輪であり片方だけでは、事業は真っ直ぐ前に進めません。

「理念」については、時として「創業の精神」と同じものと誤解されています。

「創業の精神」とは、創業者が起業する際、「何を社会に提供し、何を大事にして仕事をするか」を示したもので、変わらぬ言葉もその解釈は、時代と共に変化しているものです。

「経営理念」とは経営トップの思いや哲学を文章にしたもので、対外的に社会に示す姿勢と、内部的に職員に経営として大切にしている考え方や、将来の方向性を指し示しているものです。

しかし、トップが「精神」や「理念」ばかり唱えたり、職員に毎朝朝礼で唱和させたりするのは、念仏を唱えるのと同じで実効性がないばかりか「給料を上げる気がないんだ、待遇をよくするつもりがないんだ」などと受け止められかねません。ネットヨタの相談役の横田英毅氏は「リーダーがそれを口にした途端、胡散(うさん)臭くなる」とまで言っています。

創業の精神や経営理念が、職員の行動レベルで共有され実行されるためには、職員自らが、精神や理念をブレイクダウンして①「私たちのミッション」として心に刻まれ、②「私たちのビジョン」として共有化され、③「私たちの行動指針」として実行されることです。特に、経営理念は不磨(ふま)の大典ではありません。時代に合わせて軌道修正し、受け入れられる形に修正されるべきものです。さて「まことの心」はいかに？ (法人事務局長 野島忠幸)

事業本部情報

児童事業本部

総理大臣秘書官が LGBT などの人に対して「隣に住んでいたら嫌だ。会うのも嫌だ。」と発言したと報道がされた。以前にも東京オリンピックの組織委員会の会長であった大物政治家が「女性蔑視」の発言をしている。これに限らず政治家など国の中枢にいる人が、いわゆる「失言」をするたびに説明や発言の撤回を繰り返している。「失言」の多くは、言葉を向けられた人の痛みが思いが至らないことから起きている。大人になってから想像力の欠如を克服するのは容易ではないことを思い知る。そもそも「失言」とは「思ってもいないことを言う。」のではなく「思っていることをつい言ってしまった。」というものであり、今回の秘書官の発言からも根底にはその人の「人権意識の低さ」が感じ取れる。子どもや女性を含めた社会的に弱い立場の人の権利を守る法整備において、この国が世界的に遅れている現状が浮き彫りになっている。すべての人が幸せに安心して暮らせる社会をつくるために、子どもたちへの「人権教育」の重要性を説くとともに、ひとりひとりが出来ることとして、常に自身の人権意識に問いかけ間違いはないかをチェックすること、差別や偏見には毅然として NO と言うことを心していきたい。

(至誠大地の家 施設長 石田昌久)

保育事業本

振り返る間もなく年度末になっていました。成育しせい保育園は次年度満 15 歳になります。世田谷区に事業開始して、職員異動者 10 名新任職員 23 名、夢をもってやってきました。多機能保育事業を開設、無我夢中で取り組んだことが認知度を開花させています。毎日バスに乗って保育園に向かう中で、地域の景色も大きく変化してスーパーが出来たり、住宅の建設が始まったりしております。月日の流れを感じながら窓越しに早咲きの桜が満開になっていることにびっくりさせられました。世田谷区の待機児も解消されて、欠員の状況も騒がれて少子化が表面化し、“選ばれる保育園の時代”になってきました。次の課題は何をするかと焦り気味ですが常に変わらぬことは「保育の質の向上」です。世田谷区の保育研究会に参加したり、地域の子どものつながりを作るコンパス研究会に参加したりと今後の子どもの善き未来を想像して地域にお役に立てるように前進して、今日の一歩は明日に繋がる一歩となるようにこれからも夢をもって進めてまいります。

(成育しせい保育園 園長 浦井みどり)

高齢事業本部至誠ホーム

高齢事業本部では、令和 4 年度東京都社会福祉大会で 1 名が都知事感謝、3 名が東社協会長表彰、4 名が東社協会長感謝、令和 4 年度全国社会福祉大会で 1 名が全社協会長表彰と、計 9 名の職員が長年にわたる社会福祉の発展の功労に対し受彰されました。

先日、旭ホーム長・高齢事業本部長より、拡大園長会議の席で施設長・センター長に表彰状・感謝状の伝達いただきました。施設長・センター長以外の職員は所属長から行うことになり、至誠特別養護老人ホームでは 2 名の職員が受彰しましたので主任介護の席で伝達をしました。伝達後に、職員それぞれからひと言を頂いた時の言葉です。

あるベテランの主任職員が言いました。

「私は 20 年、車椅子を押し、前に進んできました。そして、その後ろをみなさんが押してくれてここまで来ることができました。これからも前を向いて進んでいきます。」

その他にも話されていたのですが、この言葉で十分、社会福祉という仕事に対する誇りと感謝の気持ちが伝わってきました。介護の仕事が、気がつけば社会福祉ではなくなっていると感じることが多くなっているいま、大切なことを感じさせてくれる出来事でした。

(至誠特別養護老人ホーム 園長 鈴木 篤)

(編集後記)とうとう花粉が猛威を振るう季節がやってまいりました。同時に梅の開花が香りとともにふわっとささやかれ始めました。はーるよ来い！はーやく来い！(雲)